



将来世代のために、 今なすべきことは何か？

私たちは、子ども達にどんな未来を残せるでしょうか。

子どもの貧困や児童虐待、いじめ、不登校、教育機会の格差、若い世代を追い詰める奨学金の返済など、子ども・子育てを取り巻く環境をこのままにしておくわけにはいきません。このままでは、子ども達が大切な未来を失ってしまう！私は、この10年、焦る思いで、子ども子育て政策に取り組んでまいりました。



子ども達の「未来保障」に取り組んだ10年

国内で子育て政策で頑張っている明石市（泉房穂市長＝当時）や和光市（松本武洋市長＝当時）、福岡市（高島宗一郎市長）などに足を運びました。里親さんとして何人もの子ども達を育て上げたご夫妻のお宅にも伺いました。

児童養護施設のクリスマス会や運動会には毎年お邪魔しています。また、国会でも、塩崎恭久元厚労大臣から引き継いで「児童養護・虐待防止のための超党派議連」の会長として、児童福祉法の改正や子ども基本法の制定に取り組みました。

長島昭久プロフィール

自由民主党・衆議院議員（7期目）。東京30区（府中市・多摩市・稲城市）選挙区支部長。
自民党政務調査会副会長、国際局長代理。衆議院安全保障委員会委員。自民党児童の養護と未来を考える議員連盟会長
日本スケート連盟会長、日本スポーツ協会参与、東京都銃剣道連盟会長、東京都ゴルフ連盟相談役。
昭和37(1962)年2月17日生まれ。寅年。慶應義塾大学大学院修了。米国ジョンス・ホプキンス大学で修士号取得。
これまでに、防衛大臣政務官、首相補佐官、防衛副大臣を歴任。趣味は大相撲・スケート観戦、読書、水彩画。妻と娘2人。

そして、5年前、“世界で最も子育てしやすい国”フィンランドにも自費で視察に行きました。そこで見学した「ネウボラ」という子育てファミリー・サポート事業は、目から鱗と共に涙が出るほど感動的な制度でした。

フィンランドの子育て家庭の98%が利用している無償のシステム「ネウボラ」は、昨年で創設100周年を迎えましたが、妊娠から出産を経て子どもが就学するまでの約7年間を、一人の保健師さん（かかりつけ）が健康診断を通じて家族丸ごと（親も兄弟姉妹も一緒に）ケアする仕組みです。

7年間も同じ保健師さんが家族と接するわけですから、気軽に愚痴も言えるし、悩みや不安の相談もしやすく、家庭の中で親でも子どもでもリスクが生じたら、その保健師さんが早期発見、即対応で、責任をもって適切な専門的支援につなげてくれるから安心なのです。

たしかに、似たような「切れ目のない伴走型」の子育て支援の仕組みを“日本版ネウボラ”と呼んで導入している自治体はありますが、一番の肝である「かかりつけの保健師さん」が一定期間同じ家庭をケアする真のネウボラ制度は、未だこの国にはありません。

リスクを抱えている子育て家庭は、 総じて社会から孤立しがち

たとえば、1歳半と3歳時に行う（法定）乳幼児健診。この健診会場に現れない親子が全国平均で約5%います。それ以外の95%の家庭は大丈夫だから、で済まされる問題ではありませんね。

（裏面につづく）